
はれ のち くもり

ふじ ぷらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はれ のち くもり

【Zコード】

Z6392F

【作者名】

ふじ ぱらす

【あらすじ】

海に浮かぶある島での、財産家の一人娘、美砂子と島一番の漁師の息子、太平の物語。美砂子は色々な遊びを知っている太平を頼りに思うが、会いたいときに会えなかつたりと自由が利かないことを残念に思う。それでも、2人の仲はどんどんと深まっていくのであつた。

大洋に浮かぶ島。この島はそれほど大きくはないのだが、十分な存在感をかもし出している。地形は山がちで、木が多く生い茂つていて、自然がタップリという感じであるが、特に観光できる場所があるわけでもないため、ほとんど観光客は来ない島であつた。その影響もあり、定期便はほとんどなく、本島への移動は、島の漁師に頼むことが多くなつていた。この島は潮の流れの関係で好漁場となつてゐることから、漁師が多いのだ。

釣れないねえ」

少女は竹で出来た釣竿を海に垂らしながら少年に向かって言った。
黄と赤の浮きは波の上下運動にあわせて、ふかふかと上下に動いて
いた。それが普通の動きなのだが・・・。

胸ほとの處のんか釣れたんじゃ

そのとき、少女の竿がぐいぐいとしなった。黄と赤の浮きは水中に沈んでブルブルと小刻みに動いている。水面はその浮きによつて揺らされていた。

「お二、二一。来ちる、来ちる」

「え、わ、わ、・・・」

かしてみい！」

少年はうろたえる美砂子から竹の竿を奪い、獲物と格闘し始めた。竹の竿がしなる。リールはついていないので、そのまま上に引き上げればいい。なので、糸はそれほど長くないはずだが、なかなか獲物は姿を現さない。海からの引きが強すぎて美砂子は、この少年が

海に連れて行かれるのではないかと思った。この針に引っかかつているのは、魚ではなく、なにか恐ろしいものではないかとも思った。そして、美砂子は不安になつていった。

「ター君、落ちないでよ！」

ター君とはこの少年のことで、大海太平、同じく8歳である。いつも短パンで、白の袖なしのシャツを着ている。そのシャツはいつも汚れていた。替えはないのであるうか？

「大丈夫じゃい！」

太平は意気込んで、一気に獲物を引き上げてしまおうと思った。太平の体重に対し、獲物の重さが重過ぎるのだろう、それでもなかなか上がつてこない。ただ、水面が忙しく揺れるだけである。

「ター君、がんばれえ！」

無邪気な美砂子の声が聞こえてきた。太平はいいところを見せようと一層、意気込んだ。

数分ほど経つたが、依然として獲物と太平の勝負は続いていた。
「わしは漁師の息子じゃー！」

太平の大きな声と共に、竹の竿の先端から海に伸びていた透明の糸が プツン という音をたてて無残にも切れ、太平は海からの力が突然なくなってしまった反動で後ろへと吹き飛んだ。もちろん、獲物を逃してしまったのだ。

「痛いよ、ター君。お魚逃げちゃったし・・・」

太平は美砂子の上にドスンと着地した。太平少年は背も小さく、体重も軽い、小柄な体格で、身長に関しては美砂子とさほど変わりなかつた。肌は小麦色の香ばしい感じに日焼けをしていた。

「すまんのお・・・」

太平は美砂子にいいところを見せられなくて、とても残念に思った。

「なんでじやろ・・・」

「わたしがやつたらよかつた」

美砂子は自分の当たりを逃がしてしまった太平を少なからず責めていた。それがわかつてはいた太平は悔しかつた。美砂子に嫌われてしまふのではないかとさえ思った。

「ダメじゃ、ダメじゃ。あればミーハには無理じゃ。海に落とされちまう」

太平は今回の失敗を正当化した。しかし、美砂子は納得していな様子だったので、太平は焦つていた。しかし、こればかりは仕方のないことだと自分に言い聞かせることしか出来なかつた。子供なりに美砂子になんと言えば納得してもらえるかと思考をめぐらせた。このとき、太平はぎらぎらと輝く太陽がうつとうしく感じていた。

「そりじゃ、ミーハ。あんなちつけえの逃がしてやりやよかつたんじゃ。次はもつとでけえの釣つちやる!」

後で考えれば非常に苦しい言い訳ではあることはいつまでもないであらうが、太平には精一杯の言い訳であつた。

美砂子はこくりと頷いて見せた。その様子を見て、太平は、ほつとした。だが、すぐに自分がとんでもない約束をしたことに気づいてしまつた。

太平は、漁師の息子であるのは事実ではあるのだが、父親の手伝いをしているわけでもないので、特別魚釣りが上手いわけではなかつた。それでも、美砂子に少しでも格好いいところ、男らしいところを見せたいと思ってムキになつてゐる。そして、時には今回のように大きな約束をしてしまつたり、また、とんでもない嘘をついたりしてしまつたのであつた。太平はそんな自分が嫌ではなかつたが、後悔するときが時々ある。

「あーあ、お洋服が汚れちゃつたよ」

さつき転んだので、美砂子の白いレースのついたワンピースには土がついていた。

「・・・」

太平はうつむいていた。

美砂子は服についた土を払つて、
「帰らないとお母様に怒られるから、じゃあね」と言つてその場から駆けていった。

美砂子と太平はそもそも、2週間くらい前に出会った。美砂子は、この島一番の資産家の一人娘であり、普段は本島の私立学校に通っている。しかし、今は夏休みで、この島にあるとても大きな家（実家）に来ているのである。この家は、島の人々から「お屋敷」と呼ばれている。

ある日の晩、美砂子がこっそりと一人で散歩に出かけたとき、暖かい光が差し込んでいるが、少し薄暗くじめっとした林の中に同じくらいの背丈の人影を見つけた。その人影は何かをしているようだつたので、美砂子は木の陰からじっと見ていた。よく見ると、その影は何かを作つていていた。

毎年、長期休暇にはこの島にやつて來るのであるが、1人で散歩に出かけたのはこの日が初めてだつた。それは、母親がそのようなことを許していなかつたことにある。美砂子が外を散歩したいと言つと、

「怪我でもしたらどうするの？ピアノが弾けなくなつたら次の演奏会どうするの？」

と返されるのが日常であつた。

美砂子は、ピアノのほかに、英会話などの習い事もしていたし、家庭教師も何日かに1回は必ずやつてきた。それは、この島に来てからも同じであつたし、家庭教師が来られないときは、執事の貝原明秀が代わりにやつていた。明秀は有名国立大学を首席で卒業していた。なぜそんな人物が執事などにおさまっているのかは謎であるが、給料は、小さな会社の社長など比べ物にならないという噂であるから、理由はこれなのかもしれない。ただ、給料が高いという理由だけで執事を引き受けるというのはどうにも考えにくい。他に理

由があるのかかもしれないが、それほど執事という仕事をしたくてやつているようには見えなかつた。まだ若いからどことなくそう見えるのかもしぬないが・・・。

そんな日々の中、天気がよく、お屋敷の庭で風景画を書かされたいたときのこと。美砂子は、絵画の担当の先生の監視の目がなくなつたことを確認し、そつと裏門から抜け出したのであつた。そして、今、木の陰に隠れている。

美砂子はほとんど物作りといつものしたことがなかつた。せいぜいあつたとしても、編み物くらいだつた。そのこともあつて、この人影の物作りには興味津々であつた。

薄暗い林の中でじそごそと動く影。時々、ガシャン、コンコン、カンカン、バコンッなどの音が聞こえてくる。美砂子は何が行われているのかわからなかつたが、とても楽しかつた。気がつけば、少しずつその影へと近づいて行つていた。それは完全なる好奇心というものであつた。美砂子は今までこのよだな現場に立ち会つたことが生まれてから一度もなかつたことからその好奇心はより一層強かつた。もちろん、年齢的なこともあつたであらうが・・・。

だんだんと近づいていくと、美砂子はこの人影にいつ気づかれてしまうのか、見つかつたら怒られるんじやないかと思い始めた。その途端、目の前でうじめく人影は恐怖の対象以外の何物でもなくなつてしまつた。早くその場から逃げ出さないと、と思い始め、一気に方向を転換し、走り出した。

しかし、走り始めたときに、ポキッという音が林に響いた。木の枝を踏んだだけでこんなに音がするものなのかなと思つたくらいであつたが、おそらくは、林の造りにあつたのだと思われる。音が反響し、増幅されたのだろう。それは、人影が生み出していた音に関しても同じことが言える。

「誰じゃ？」

「いやして、美砂子は太平と会ったのであった。

太平の父親は島一番の漁師で、いつもその跡を継ぐのだと美砂子に語つた。

美砂子は太平と過ごす時間がとても新鮮で、楽しかつた。

しかし、そんな時間を簡単に取れることは少なかつた。こつそりとお屋敷を抜け出して、なんとか太平と会うことが出来たのであつたが、それは少しの時間しかなかつた。もちろん、そのことが母親にバレないはずがなく、こつ酷く怒られた。ところが、母親は美砂子が習い事に集中できないことがわかると約束を交わすことにした。

「どうしてもお外をお散歩したいの？」

「うん」

「じゃあ、明秀と一緒に行きなさい。でもそれは、美砂子の習い事がない時間だけよ」

美砂子としてはそれで十分だと思った。それは、明秀なら大目に見てくれるだらうという安易な考えがあつたからであつた。ただ、習い事がない時間というのはそれほど多くはなく、食事の時間などを除けば多くても1日につ2時間位だつた。

明秀には「友達と遊ぶからお母様には内緒にしてて」と言つてごまかしているのであつたが、もちろんのこと明秀はあまりそれをいふことだとは思わなかつた。しかし、明秀がそれを断ろうものなら美砂子はその場に寝そべつてワンワンと泣き喚いたのであつた。明秀は困り果てて、一緒についていくなら構わないと、譲歩したが、それでも美砂子は納得しなかつた。いつまでも泣き喚くので明秀は最後の最後には折れてしまった。

太平くらいの年齢の少年なら誰でも秘密基地を作つてそこに潜んでいることに喜びを得るものである。もちろん太平も例外でなく、秘密基地を作つていた。それが、美砂子と出会つた現場であつただ。

太平はあまり友達がいなかつた。というよりは、作ろうとしなかつた。そのことから考えれば、美砂子という友達、しかも女の子の友達を持つなどということは異例中の異例であつた。しかし、何故かこのような異例中の異例が実現したのかといふのは簡単なことであつた。太平は、何も知らない美砂子にいろいろと教えてやりたい。そして、一種の優越感に浸りたかつたのであつた。太平は根っからの負けず嫌いであつたこともそれに影響している。

「ミー」はこの基地にいつでも来てええからの

「うん」

「2人だけの秘密基地じゃ」

太平は自信満々であつたし、美砂子はとてもうれしかつた。

「タ一君つてすごいね」

といふのが美砂子の口癖になつていたし、太平はその言葉がたまらなくうれしかつた。太平は、今、この言葉を聞くために生きていると言つても過言ではなかつた。

秘密基地にはガタクタがたくさん置いてあつた。そのガタクタが美砂子にとつては新鮮であつた。いつそのこと花畠の写生をするよりは、ガラクタの写生をしたいと思つたくらいだつた。習い事のとのひとつとして絵画があるのだが、花畠の写生はその課題である。

美砂子は習い事をたくさんしているために、いろいろなことが出来た。しかし、太平は美砂子の出来ないことを次々とやつてのけるので、美砂子は驚きっぱなしであつたし、太平と過ごす時間がとても楽しかつた。

「タ一君。私そこまで行けないよ~」

「高くて見晴らしがええぞ。ミー口にも見せてやりたいが残念だわい」

「いいな~。タ一君」

太平は、秘密基地の近くの木にひょいひょいと登つて美砂子を見下ろした。木の上からは島全体が見渡せた。この林で一番大きな木で、なぜか一つ頭飛び出していた。太平が下を見ると、美砂子が木に登ろうとしては、やめ、登ろうとしては、やめ、を繰り返していた。美砂子は怪我をしたらもう太平に会えなくなるであろう事をわかつていた。だから、木に登つていきたい気持ちを必死に抑えていたのだった。それに、服が汚れてしまつては母親にバレてしまつと思つたのもあつた。

「ミー口、手伝つちやろか?」

「つうん、いい。ここから見てる」

美砂子は、太平と会えなくなることよりは木に登るのを我慢することを選んだのだった。

結局、太平は、美砂子は木登りが出来ないのだとわかつたので、他の遊びをすることにした。

「そうじゃ、ミー口」

太平が木から下ると降りてきながら言つた。

「なに?」

「魚釣りしたことあるか?」

「魚釣り?」

「なんね?知らんね?」

「知ってるよ」

「そいじゃ、話が早い。やつてみようや」

美砂子はすっと家の中に閉じこもったような生活をし、ほぼ毎日
事ばかりをしているため、知らないことも多かつた。魚釣りはどちら
いふことであるかということを知っていたが、どれだけ楽しいか、
などということは全く想像がつかなかつた。でも、太平が提案する
ことなのだから、楽しくないはずがないと思つた。

「うん」

美砂子はすぐに返事をした。

美砂子は、太平の後ろについて歩いて行つた。そこは、今まで来たことのないところだつた。美砂子は少し不安になつたが、太平は男らしくて、頼りになるから大丈夫であつた。

「ん~、そいやの~」

ここには秘密基地からちょっと離れたところにある竹やぶであつた。太平は、あちこちの竹を見回つていた。

「かぐや姫でも探してるの?」

美砂子は、真剣に尋ねた。

「バカやの。そんなおるわけねーじゃろが」

と言つて太平は大きな声で笑つた。美砂子はなぜ笑われたのかよくわからなかつたが、なんだか悲しくなつた。そして、泣きそうになつていた。「バカ」なんて生まれてから一度も言われたことがなかつたからであつた。家にいたらほどんど「いい子ね」である。

「すまん、すまん」

太平は、泣き出しそうな美砂子の様子を見てあわてて謝つた。そのときに、頭にたけのこをのつけていたため、美砂子は思わず大笑いしてしまつた。太平は粗い通りにことが運び有頂天になつて、もう一つ頭にのつけて鬼のように振舞つた。

「なにそれ~」

美砂子は、笑いが多少収まつてから頭の上を指差して言つた。

「たけのこじや、たけのこ。これが大きくなるとこれになるんじや」と、そばにあつた竹を叩きながら言つた。

この時期にたけのこがあるのは不自然である。たけのこは普通、春によく見かけるものである。おそらく、その辺に落ちていたたけのこの忘れ物を拾つたか、季節はずれのたけのこを取つてきたかのどちらかであろう。どちらにしろ、珍しかつたから拾つてきたに違ひなかつた。なぜなら、太平は、美砂子がたけのこを知らないこと

に少し驚いたからである。

太平は、たけのこを知らない美砂子はひょっとしたらもつと知らないことがいっぱいあるのではないかと思い、さらに優越感に浸ることとなつた。一方、美砂子は何でも知つていて太平を頼りにしていたし、次は何を教えてくれるのだろうかと毎日わくわくしていた。このために、習い事のほとんどに身が入らなくなつていた。習い事の時間が終わると

「あきひで～、あきひで～」

と叫んで、明秀を呼び、すぐに外へと出かけるのであつた。そのとき、明秀は美砂子の母親に対して大きな罪悪感を抱いていたが、美砂子に嫌われたくなかったし、また、大声で泣かれてはかなわないと思い、嫌々ながら許していた。美砂子は母親はもちろん、明秀にも太平のことを言わなかつたし、もちろん、どんなことをしているかも言わなかつた。ただ、美砂子は怪我はもちろん、服も汚すことなく帰つてきていたので、明秀はそろそろ安心してきていたし、母親にはちつともバレてはいなかつた。怪我をしない、服を汚さないといつのは美砂子が十二分に気をつけていたことであつた。

太平がよそそな竹を秘密基地から持つてきていたのこぎりを使つて切り始めた。よそそな竹というのは、たけのこ以上大人の竹未満の釣竿に適した竹のことである。そんな竹を2本ほどこしらえて、満足げに竹やぶから少し離れているところで見ていた美砂子のもとに戻つてきた。

「竿できたぞ」

そのうちの一本を美砂子に押し付けながら白慢げに言った。

美砂子はキヨトンとしていたから太平は少しがつかりした。もつと喜んでもらえるものと思っていたからだつた。ただ、美砂子は、これでどうやって魚釣りをするのかよくわからなかつた。

また、美砂子は、太平に連れられて歩いた。そして、秘密基地へと戻つてしまつた。

「あれ？魚釣りつて海でやるんでしょう？」

「ん？ そうじやけど、糸と針をつんと」

そう言つて、太平は慣れた手つきで自分の竿と、美砂子の竿に糸と針をつけた。

「うし、じや、Hサ集めるぞ」

「エサ？」

「///ズに決まつちよる」

美砂子はぞつとした。ピンクっぽい、細くて長いものがうねうねしていた。太平は小さくて赤く、少し鋸びているスコップで土を掘り返して、そのうねうねしている生き物をたくさん集めて、プラスチックの透明の容器の中に入れていた。

「そんなの使うの？」

「おう、よー釣れるんじや」

美砂子は結局、太平が///ズを集め終わるまでじつと見ていた。じつと見ていたといつても、///ズを直視したくなかったので、他のものに意識を集中していた。ところが、途中で、自分の立つている地面の下にもこの///ズがいるのかと思つて、とても嫌になつた。

「こつちにやらぬいでよ」

美砂子は太平に向かつて、///ズが怖いことを伝えた。

「そうか、ミーハは怖いんじやな、///ズ」

美砂子はぎこちなく頷いた。

しかし、美砂子にとつての///ズの恐怖は地面を掘り返すときだけにとどまらなかつた。

「これを針につけるんじや」

太平は、美砂子にプラスチックの透明の容器の中で、うねうねとうぐい///ズを指して、先生が生徒に数式を教えるかのよつにき

つぱり言つた。

美砂子は、首を左右いっぱいに振つた。

「しょーがないの。わしが手本見せちやる」

太平は、慣れた手つきで容器からミミズをひょいとつまんだ。ミズは、容器の中よりも増してうねうねし始めた。美砂子はガクガク震えていた。そんな美砂子にかまわず太平は、ミミズを片手に、もう一方に針を持ち、ミミズを針につけた。それでもまだミミズはうねうねと動いている。美砂子は泣きそうだった。

「見ちよれよ」

太平は、そのミミズを、水面が周期的に上下している穏やかな海へと、桟橋の上から投入した。数十秒経つて、太平はくいっと竿を上に振つた。

「よし」

穏やかな水面に水飛沫が立ち、10センチほどの小さな魚が水面から空中へと移された。そして、太平の手の中に納まつた。

「アジじやな。秋によく釣れるんじや。ちっけーのがな。この時期に釣れるのはちょっと珍しいわい」

美砂子は、アジに興味を持つた。さつきまでうねうねとじこめく得体の知れない生き物だったのが、ちょっと愛着のわきそうな魚に変わつたのが面白かつたからだつた。海というのは不思議なものだとも思つた。ミミズが魚に変わるのはだから。いわゆるブラックボックスだ。ただ、魚に触ることは出来なかつた。ぴちぴちと動いていたのが少し怖かつたからだつた。

「わしがミミズつけちゃるから」「もやつてみい」

美砂子は笑顔で首を縦に振つた。

太平が、美砂子の竿にかかつた大物を逃がす少し前、秘密基地で一緒に過ごしていったときに美砂子に島の夏祭りの話をしたことがあった。

「夏祭りはな、いろんな店が出て、歌をうつたり、盆踊りを踊つたりして、みんなで盛り上がるんじや。最後はみんなで花火大会をやるんじや。金がねえから空には打ちあがらんのじやがな」

美砂子は目を輝かして、秘密基地の中に作られた美砂子の椅子に座つていた。その椅子とは、中に古本をいっぴい敷き詰めたダンボール箱である。太平は、その上に自分の家から持つてきたレジャーシートを敷いて、美砂子の服が汚れないように工夫した。なぜそんなことをしたのかというと、最初にダンボールだけで作つたときに「これじゃあお洋服が汚れちゃう」と、美砂子が言つたからであつた。

「そうじや、今度の夏祭り、ミー口に見せちやる」

太平は、美砂子に夏祭りの日を告げた。美砂子は、絶対に行くからと何度も何度も言つた。

太平と会うと美砂子は釣りに行くことが多かつた。ミミズは未だつけられなかつたが、何匹か魚を釣り上げることが出来るまでになつていた。しかし、未だ魚も満足に触れていなかつた。

「ター君。とつて、とつて」

美砂子は魚が連れるたびに太平に頼んだ。太平は特に嫌がることもなかつた。

「しょーがないのあ」

といいつつも、自分が頼らされていることがとてもうれしかつた。

そして、ついに、美砂子が大物をヒットさせたが、太平が逃がし

てしまつところ出来事があつたのだった。

お屋敷に帰ると、美砂子はトイレに入り、必死に白のワンピースについた茶色い土の汚れを洗い流そうとした。明秀とお屋敷に帰る途中では、ずっと汚れている箇所を見せないように歩いていたため、明秀には、バレていないうようであった。

何度も何度も水をつけて、こすつてみた。服が今にもびりつと破れそうだった。それでも美砂子は必死にこすつた。何度も何度も。しかし、一向に汚れが落ちる気配はなかつた。美砂子の目からは涙が溢れてきた。これは、服が汚れた事の悲しみではなく、これが母親にバレてしまつたときのことを考えてであった。

仕方なく、トイレから出て、自分の部屋にとぼとぼ戻つた。そして、クローゼットを開け、他の服を取り出して着替えた。まだ目からは涙が溢れていた。

さつきまで着ていた白のワンピースをクローゼットの中に隠し、習い事に出来るために目の涙をハンカチでぬぐつて笑顔を作る練習をしてから部屋を出て行つた。すると、そこには母親が立つていた。

「美砂子、どうして着替えてるの? まあいいわ、先生がいらっしゃるから早く行きなさい」

幸いにも、母親は服を着替えたのには気づいていたが、習い事の時間の関係で急いでいたため、深く触れることなく、美砂子を先生の待つ部屋へと向かわせた。

この時間は、算数の勉強の時間であったのだが、全く集中できなかつた。少し油断したら目から大粒の涙が溢れてきそうだった。頭からクローゼットに隠した白いワンピースのことが離れなかつた。

しかし、このことがバレてしまつのも時間の問題であつた。次の日の朝には、母親が発見してしまつた。

「美砂子、これはなに?」

きつい、母親が子供を叱りつけのような口調だった。いつもは、ほとんど怒らない母親であつたが、何か隠し事をしたり、うそをついたりしたときにはとことん怒った。

美砂子は答えなかつた。

「何つて聞いてるの」

それでも美砂子はじつと立つて黙つたままだつた。

らちが明かないと思つた母親は、明秀を呼び寄せた。電光石火、明秀が氣まずい空氣を出しているこのふたりの所へやつてきた。

「これはどういって? あなた何か知つてるでしょ?」

明秀は

「存じ上げません」

と言つそうになつて、やめた。それは、自分の監督責任が問われることになつてしまいそうだとこつ自分勝手な考え方からであつた。そして、

「お嬢様が転ばれまして・・・」

と下手な言い訳をした。美砂子の立場は、明秀が「存じ上げません」と言おうと、「転んだ」と言おうとそれほど変わりはなかつただろう。どちらにしろ、お屋敷から外へは出られなくなるのだろうから・。。

その後、母親は美砂子に汚れた服を隠したことについて酷く注意した。このことも加味され、美砂子は習い事のとき以外は部屋の外に出来ることが許されなくなつてしまつた。ドアのところには明秀を立たせて見張らせた。

「あきひで~、ちょっとでいいから~」

美砂子は何度も明秀にねだつた。

「申し訳ありません、お嬢様」

しかし、太平との約束の夏祭りの日に一歩も外に出ることは出

来なかつたのであつた。

夏祭りなど、美砂子は夏休み」とこの島にやつてきているのであるから過去に1回や2回は行つていてもよさそななものである。しかし、習い事が夏祭りもなにも関係はなくあるものだから1度も行つたことがなかつたのである。もちろん、母親が教育に必要なものとして位置づけていたのも大きく影響していたのは事実である。

美砂子の度重なるおねだりに参つたため、さすがに、何日も何日も部屋に閉じ込めておくのはかわいそうだと明秀が母親に申し出た。普段あまり意見をすることはなかつた明秀であつたが、このときばかりは、美砂子のことが本当にかわいそうに思つたのであつた。

明秀も美砂子のこの年齢くらいの頃、英才教育の名のもとにさまざまな習い事などをさせられ、普通の生活を送ることは出来なかつた。それでも、外出することくらいは許されていたし、友達と外で元気よく遊ぶことは出来ていた。それすら出来ていない美砂子はやはりかわいそうだと思つたのであつた。

仕方なく母親も同意し、美砂子を部屋から出すことを許可した。そして、明秀がもつと注意深く見ることを約束し、外出の許可までを得た。ただ、今までと同じように何度も何度も外出することは出来なかつた。少しでも怪我の危険を回避するために、外出の頻度が減らされたのであつた。

明秀にいつものように友達と遊んでくると言つて秘密基地へと出かけて行つた。明秀は明秀で、このときばかりは、かわいそうな美砂子を見て、許可をする以外の選択肢が思い浮かばなかつた。もちろん、こんなことがバレようものなら明秀は執事としての職を失うだろう。明秀はそれくらいの覚悟は出来ていた。そもそも、明秀は、ここ数年でお屋敷にやつてきたばかりであつたので、長年ここに使えている執事ではない。だから、それほどこの母親の教育方針に洗脳されていないのであつた。

「すまんのお・・・・・すまんのお・・・・」

美砂子は、「なんで夏祭りの日に来なかつたんじゃ？」と厳しく問い合わせた太平に対して、以前、太平が美砂子がヒットさせた大物の魚を逃がしたときに美砂子に謝つたときの言い方を真似た。

太平は、大笑いした。

「わし、そんなのじやないわい！」

途中で笑つている自分が恥ずかしくなつて、ふてくされたように言つた。

「まあ、そんなこともあるじやろ。うちのおやじもいかん、いうたら、いかん、つてのがあるんじや。ミーノもせんなんあるじやろ。許しちゃる、許しちゃる」

美砂子は、心配そうな顔だつたが、この言葉を聞くとすぐに笑顔に戻つた。

「それでじや、ミーノが祭りに来なかつたからわし、ミーノに花火を見せちゃうと思て、持つてたんじやが、おやじに見つかつて取り上げられてのよ」

太平は、自分が花火をこつそり夏祭りの会場から持つて帰る動作、それが見つかつて父親に取り上げられる動作を面白おかしくやつた。

「それでの、わし、考えたんじやが・・・・」

と言つて、秘密基地の奥から美砂子が座つているものとは別の小さなダンボール箱を取り出した。それには布がかぶつていて、中が見えなくなつていた。太平はそれをうれしそうに美砂子に見えるようを持つた。

「なんじやと思う？」

「わかんないよ、ねえ、なに？なに？」

美砂子は、心からその中身が気になつた。太平が夏祭りの変わりに用意してくれたものなのだから、きっと何か特別なもので、すごいものなんだと思っていた。

「じゃじゃ～ん」

太平は、その布を大きな動作でさつと取り除くと、箱いっぱいの

きれいな貝殻が顔を覗かせた。美砂子の顔は貝殻と同じくきらと輝いていた。

「これどうしたの？」

美砂子は尋ねた。

「これわのあ、わしが秘密の海岸で集めたものなんじや。特別にミーノのために集めたんじや」

「うわあ～」

美砂子はその貝殻を手にとつてより一層、目を輝かした。

「ねえ、その海岸、どこにあるの？ねえ」

「それはミーノでも教えられん。わしだけの秘密の場所じや」

太平は、わざと美砂子に意地悪して見せた。本当は心の中で見せびらかしてやりたい気持ちでいっぱいだったのだが、何か心の中の違った感情が、美砂子に意地悪をさせたのであつた。

「もう、けち～」

美砂子はむすっとした顔を作つて冗談交じりで太平に言つた。

美砂子は、太平からもらつたきらきらと輝く貝殻の入つた小さな段ボール箱を抱えていつものように、約束の時間に明秀と待ち合わせをしているところへと戻ってきた。その約束の時間までに明秀は、図書館で読書をしていたり、ぶらぶらと散歩をしたりしていて、美砂子の跡をつけたりは決してしなかった。

「お嬢様、それはどうされました？」

「もらつたの」

美砂子は素直に答えた。明秀は心配そうな顔をした。それを感じ取つた美砂子は、

「大丈夫。お母様には、明秀と海岸に拾いに行つたことにするから」「ですが・・・」

明秀は少し困つたような表情をしていた。

「なんですかーーー汚い」

母親は、明秀と一緒に貝殻を拾つてきたと言う美砂子に向かつて怒鳴りつけるように言った。その横には、かなり小さくなつた明秀が立つていた。彼は、だから言わんこっちゃない！と言つたような表情をしていた。美砂子の母親は根っからのキレイ好きで、外に出かけることを極端に嫌つていた。ましてや、外に落ちているものを拾つてくるなどといふことがあらうものなら、このようなことになつて然るべきなのである。

「お母様、私がすべて洗いますので・・・」

明秀は、小さなまま言った。その小ささとこゝのは、美砂子と同じくらいだろうか？ それくらい萎縮していた。

「それじゃあ、綺麗に洗いなさいよ！」

これで許してもらつたのは奇跡だつたと言えよ。ここ最近の美砂子の行動にもう呆れて、諦めてしまったのだろうか？ いや、そん

砂子の行動にもう呆れて、諦めてしまったのだろうか？ いや、そん

なことはない。そう、そんなことはなかつたのだつた。

綺麗に洗いなさい！と明秀に命令した後、母親は、冷静になつて考えた。

（ そういうえば、ここに執事に来てほんと間もない明秀が、この島でほんと外出した事のない明秀が、どうして、どうして、貝殻が落ちているような海岸を知つているのだろうか？）

この島には、ほんと海岸がなかつた。あつたとしても、断崖絶壁を下つていつたところ。その他にもあるかもしれないが、そんな穴場を明秀が知つてゐるはずがなかつた。

綺麗に洗われた貝殻が美砂子の部屋へと明秀の手によつて運ばれた。貝殻は最初に入つていた粗末な入れ物ではなく、お金を出さないと手に入らないような入れ物に変わつていた。もちろん、貝殻は違う意味できらきらと光つてゐた。

美砂子は安心した。洗われた後ではあつたが、貝殻は元の輝きを失つていなかつた。このきらきらとした輝きは、美砂子の笑顔へと移つていくのだつた。その様子を見た明秀は、苦労して貝殻を磨き上げた甲斐があつたと思つた。一つ一つ手で黄色のスポンジを片手に汗を流しながら洗つたのだつた。スポンジにした理由は、タワシやブラシだと貝殻に傷がついてしまうかもしれない、といつ美砂子への気遣いのためだつた。明秀は、美砂子に気に入られること、なついてもらつことが、とりあえずの目標であつた。そうすれば立派な執事がつとまると思つてゐた。

「美砂子、明日は私とお散歩に行きましょう」

一同、目を白黒させた。食事の席で、美砂子の父親がいたが、思わず口に入れていたワインを噴出しそうになつてしまつた。それほど、母親のこの発言は驚きのものであつたのだつた。

三井家では、家族全員で、食事をすることが決まつてゐた。三井家のお屋敷には、美砂子、その両親、および、その両親4人が住ん

でいた。ただ、美砂子から見て、祖父祖母にあたる4人は隠居生活とも言えるような生活をしており、食事のときくらいしか顔を見せない。普通の祖父祖母であるなら、孫の喜ぶ顔を見るためにあれこれとちやほやするものであるが、美砂子の母親がこれを一切禁じていたため、顔を合わせたびにかわいそうに見えて仕方がなかつたために、部屋で老後の趣味にふけつているようであつた。

「私は行かずに、お母様が行くのですか？」

傍にいた明秀が、しばらくの沈黙を破り、控えめに言つた。

「そうです。明秀は、今回は行かなくてもよろしい」

きつぱりと言つた。なんとなく今日の母親は違つてゐると美砂子は感じ取つた。女の勘とでも言おうか……。

美砂子は、母親に連れて散歩へと出かけた。本当は美砂子は行きたくないかった。それは、言つまでもないが、太平と遊ぶことなど絶対に不可能であるからだ。母親にそんなことを言い出そうものなら、本島に強制送還もいいところだろう。今日は、習い事の関係で、正午前の2時間が散歩の時間と決まった。

「いつもどこを散歩しているの？」

母親はやけに優しく美砂子に問いかけた。

「わからない。明秀が連れて行ってくれるところだから」

嘘に嘘を重ねるとそのうちぼろが出てしまつことは、この年齢の美砂子にはまだはつきりとわかつていない。ただ、明秀は、絶対に自分の見方であるし、こざとなつたら自分をかばつてくれると信じていた。

「それじゃあ、貝殻を拾つたところもわからないのね？」

「うん」

美砂子は、ぎこちなさを隠すために、自然に、自然にと心に何度も何度も呼びかけて、自然な笑顔、自然な受け答えを試みた。

無事に1日目の散歩は終わった。

しかし、母親は、何か推測に過ぎないことではあるが、確信しているようだつた。それは、美砂子が散歩の間に、異常なことをしている。異常なこととはどんなことか？それは調べてみないとわからぬ。それで、今後も散歩に付き添うこととしたのだつた。

普段、母親は自分の趣味（と言つても高尚なものだが）や、美砂子の教育方針に関する考え方などに時間を使うことがほとんどで、外に働きに出ることなどはもちろんなかつたし、家事をすることもなかつた。ただし、料理は別だつた。母親は料理を家事という単語

のくくりに収めていなかつた。それは、母親というものは、子供に手料理を作るものだという確固たる（固定的な）概念を持っていたからである。

2日目散步は、午後3時から1時間半の予定で行われた。美砂子にとって、この散步が2日前とは全く違う意味を持っていた。一つだけ、恐れていることがあるのだった。この島の中を散歩することにおいては避けられない、あることが……。

そのことは、早くも2日目にして起つてしまつたのであつた。

「あ、ミーーハー！」

太平は、母親と2人で仲よさそうに歩いている美砂子に呼びかけた。太平は、少し遠くの岩の上に立つていたため、母親の目には入つていよいようだつた。そもそも、母親の中に美砂子＝ミーーハーの定義はないのである。

美砂子は、「来ないで」と心の中で思つた。そして、体中から変な汗がにじみ出してきた。今、この場をいち早く離れたい。どうにかして、太平の存在を母親に知られることなく、ここを立ち去りたい。そればかりを考えていた。

「お母様。トイレに行きたくなつちゃつた……」

美砂子は、苦し紛れの言い訳をした。

「あら大変。どうして、出かける前に行かなかつたのよ？」

「・・・」

「しようがないわね。帰りましょ」

事は美砂子の思い通りに進む、・・・はずだつた。

太平は、呼びかけたのに、美砂子が振り向きもしなかつたことがら、自分の存在に気づいていないのだと思った。そして、何度も叫ぶよりも、そこまで駆けて行つたほうがすぐに気づいてもらえると思い、何も知らず、そこへ駆けて行つた。

「よつー／＼ー／＼」

お屋敷へと引き返す途中だつた2人に追いついた太平は元気よく言つた。このとき、美砂子の半径3メートル以内には、自分を含め3人しかいない。どうかんがえても、この少年、太平は、美砂子に話しかけているとしか考えられない。子供でもそんな風に考えられるのであるから、横にいる大人の母親が気づかないはずがない。

「あれ？ 美砂子のお友達？」

母親は、小さな太平少年の目線に合わせてしゃがみこんで、小さな子供に話しかけるように優しく話しかけた。

「そうじや、そうじや。2人だけの秘密基地も持つちよる」

秘密基地を持つていることをしゃべつてしまつたら、それはすでに秘密基地ではないのではないか、と美砂子は一瞬考えたが、すぐにそんなどうでもいい考えは吹つ飛んだ。

「今日は、美砂子、忙しいの。また今度ね」

母親は、なおも太平少年に優しく話しかけた。物分りのいい太平は、じくりと頷いて、美砂子に「バイバイ！」と言つて走つて去つていつてしまつた。

これで何もかも終わつた。美砂子は一瞬にして、しかし、すべてを悟つた。

お屋敷に帰るまで、母親と美砂子は一言も話をしなかつた。美砂子は、その無言の母親を解釈することに混乱していた。どうかんがえても、じじは怒るべきところであると美砂子でも十分わかつていた。

「明日、本島へ帰るから今夜のうちに準備をしなさい」

お屋敷の門をくぐつた母親は、こうとだけ美砂子に言い残し、すたすたとお屋敷の大きな扉の中へと吸い込まれて行つてしまつた。

9・突然の別離

次の日、お屋敷の庭にあるヘリポートから1台のヘリコプターが飛び立とうとしていた。そのヘリコプターは、空の青に同化するような綺麗なスカイブルーの色をしていて、ローターがブルブルと美砂子の心の中とは180度違う心地よい音を奏でながらまわっている。ヘリコプターの運転席には、明秀が座つて、計器の確認をしていた。これが明秀の最後の仕事となるのである。

また、ヘリコプターには、いろいろな私物が詰め込まれて行つた。しかし、それは最低限度必要なものだけであつて、残りのものは、高速船を使って運ばれる予定になつていて。今日は天氣がいいので、船が出られなくなることはないだろう。波も至つて穏やかだ。ただ、午後からはくもりとなる予定らしいから、午前中にすべてのものの移動を済ませてしまふのがいいだらう。

美砂子は、冴えない表情で朝を迎えていた。せめて、太平に手紙だけでも残しておきたいと思つていた。しかし、その時間はなかつたし、そんなものが母親に見つかろうものなら、もつとひどい仕打ちが待つてゐるに違ひなかつた。仕方なく、また次の大型休暇になつたら太平と会えるんだと自分に言い聞かせて、足を動かし、スカイブルーのヘリコプターへと向かつていつた。そのスカイブルーは普段はさわやかな色として見えるのだが、なぜか今日は孤独な色に見えた。

ヘリコプターは、美砂子、母親、明秀を乗せて、本島への強烈な意味を持つた旅を始めるために離陸した。辺りの草花が、離陸の際に生じる風圧によつてゆらゆらと揺れている。ヘリコプターが奏でる音の間隔はだんだんと短くなり、さらに、高くなつていつた。そして、ついに空と同化した。

本島に到着すると美砂子はさらに衝撃の事実を知るに至った。

「もう、あの島には戻りませんからね」

母親はきつぱつと言った。

「お父様も船でこちらに来られます」

2つ目の情報は美砂子にとつてどちらもよかつた。あの島に戻らない、これが衝撃の事実である。

言つまでもなく、美砂子にはわかつていたが、太平から美砂子を遠ざけるために母親が、こゝでもしないと美砂子が習い事に集中できないうだうと思つたのである。美砂子にとつてはいい迷惑であったが、母親には昔から逆らえなかつた。昔から、母親の言つことは絶対であり、決してそれを曲げることは出来なかつた。散歩を許可するようになつたことを除いては・・・。

美砂子は、夏休みの間、ほとんど家のなかから出る」とはなかつた。家と言つても高層マンションの最上階にあるもので、そこから出で行くのには一苦労だ。そのマンションの中には食品売り場や、雑貨売り場などはもちろん、生活に必要な店などはほとんどそろつていた。ほとんど家から出ることがなかつたと言つたが、これは、母親が見張つていたからであった。いくら本島に来たからといって急に外出をしたくななるというのも考えにくいと母親は考えていた。

執事の明秀に暇をとれたことにより、三井家の執事はいなくなつていた。それでもなんら不自由はなかつた。少し母親の家事が増えるだけであった。

新学期が始まる頃には、妙な好奇心はほとんど薄れていた。そして、そのエネルギーはほとんどすべて知的好奇心へと変わっていたのであった。

美砂子は、それから、勉強に一生懸命になつた。それは、勉強しかすることがなかつたと言うのが一つの理由であるが、もう一つ、こうしていれば母親は何にも文句は言わないという理由もあつた。良くも悪くも、美砂子は、学校でトップクラスの成績で、有名大学に進学。そして、有名企業の社長秘書となり、この上なく、くすばらしい人生を歩み始めた。これは、母親のおかげであつたし、自分がんぱりでもあつた。母親はさぞかし満足であつただろう。もう今では26歳になつていた。

美砂子は、仕事の長期の休暇が取れたため、祖父祖母の墓参りのために、例の島へとやつてきた。今日もいい天氣である。この島は、雨の日は少ない。

祖父祖母の墓は立派であった。美砂子は今まで葬式と、区切りの年以外、この島に来ることはなかつた。しかし、この島は、日帰りで十分であるので、別段休暇が取れなくとも来ようと思えば来れるのであつた。それでも、美砂子にはなんらかの動機付けが欲しかつた。普通の週末は普通に過ごしたいと思つていた。オーケストラのコンサート、ミュージカル、読書、そんな非日常的な世界にじつぶりと浸かりこみたかったのだった。

墓参りを終えた美砂子は、今は空っぽ同然になつたお屋敷を眺めていた。時々、新たに雇つた家政婦に掃除をしに来させていると母親に聞いた。いつそのこと売つてしまつてはどうなのかと思つたが、美砂子の両親も隠居生活はここで送るのだろうと美砂子はほんやりと想像していた。

美砂子の服装は、白地のワンピースで、かわいらしくピンクのリボンのついた帽子をかぶつていた。さらに、首元には真珠のネックレス、腕には金色に輝く小さな腕時計、そして、赤いハイヒール。普段のスース姿からは全く想像がつかないような服装であった。

美砂子は、8年前のこつそり抜け出した散歩についてゆっくりと思い返す時間が持てた。何年も何年もこの島に長期休暇ごとに来ていたのに、ほとんどこの島のことを知らずに、この島のよさを知らずに帰つていたことを残念に思つた。美砂子は、8年前、ああいう風に、この島と分かれなければならなかつたことはショックであつたが、同時に、この島のことをいろいろ知れてよかつたと思つてい

る。もし、あそこで抜け出さなければ、一生あんな体験は出来なかつただろ。世間一般の普通の人が楽しむ遊び。美砂子は、それらにちょっとだけでもいいから触れておいたことは決して人生においてマイナスポイントだとは思っていない。母親はどうやら違つてゐるようだつたが……。

現在、母親は美砂子のしつけ係を引退し、自分の趣味により一層力を入れていた。美砂子も母親のように高尚な趣味は持つてゐる。ピアノは弾けるし、バイオリンだつて弾ける。

そんなことを考えているうちに見慣れないところへ出てきた。しかし、後ろを振り向くとお屋敷は見えている。このお屋敷は、この島のどこから見ても見えるのである。（秘密基地からはさすがに見えないが……）

この見慣れないところは、どうやら漁港のようであった。いくつもの船が波の上下運動にあわせてゆらゆらと揺れていた。岸とはロープでつながれていて、それをはずさない限りはひとりでに大海原へと旅立つていくことはなさそうだった。美砂子は、この船と自分、ロープと母親を少なからず重ね合わせてしまつ自分がいることに気づいた。それでも、母親が美砂子にしたことは、よかれと思つてしたことであつたし、もちろん、その結果として、十分すぎる人生を送れているようである。しかし、それは、世間が言う、である。美砂子は、これが十分だとは思つていたが、十分すぎるほどまでは思つていなかつた。何かスパイズが足りないと……。

いくつもある船を見渡していると人影が見えた。8年前の出来事が走馬灯のようによみがえつた。立派な漁師になると言つた太平。太平は、今、一人前の漁師となつてゐるだろうか？それは、美砂子自信への問いかけでもあつた。自分は満足のいく人生を送っているのだろうか？というものだ。

はやる気持ちを抑えつつ、その人影へと近づいて行つた。

「ター君？」

美砂子は、思ったよりも大きな声が出て、それが、ここ数年で一番大きな声であつたので自分自身で少しひっくりしてしまつた。あまり大きな声を出す必要がない生活ばかりしていたから、すこし感覚が麻痺していたのだろう。

呼びかけられた人影は、ひょいひょいと船の上の道具を飛び越えて、美砂子のほうへとやってきた。黒く日焼けして、短パンに袖なしの白いシャツ。そのシャツは汚れていた。

「おお」

それはまさしく太平だつた。

「あんまり変わつてないね」

美砂子は、一気に8年前に戻つたかのよつに自然に話を始めた。

「そつちもじやな」

太平はなぜか、ミー口と言わなかつた。それ以前に、美砂子と田を合わそうとしなかつた。そんな太平を見て、美砂子はちよつとほほえましく思つた。

「ター君さ、」

なんで照れてるの？とでも聞こうと思つたとき、その言葉をかき消すように大きな声がした。もつとも、この質問をしていたとしても、流されるが、ター君と呼ぶのをやめろというかのどつちかだつただろうと美砂子は思つていた。それは太平の様子を見ていればよくわかつた。

「今朝のう、大漁じやつたんじや。お、そりじや、そりじや、ちよつと待つちよれ」

そう言つた太平は、船の裏（というのは美砂子の見えないほうである）へ回つて何か白い発泡スチロールの箱を持ってきた。そして、美砂子の田の前までやつてきて、その箱のふたを取つた。

「ほれ、あんとき逃がしたやつ、おーきなつたわい

(
完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6392f/>

はれのちくもり

2010年10月8日15時21分発行